

ダンディズム、あるいは“孤独”と“仮面”の変奏曲

—柴田錬三郎の『眠狂四郎無情控』をめぐる一考察—

山口 和彦

キーワード：ダンディ 不羈独立 仮面と素面 アイデンティティの探求 終幕への予兆

I はじめに

眠狂四郎という変名を用いる稀世の剣の使い手が初めて世に登場したのは、『週刊新潮』の昭和31年5月8日号においてであった。当時の経済白書に「もはや“戦後”ではない」¹という一文が加えられたこの年に連載が開始された『眠狂四郎無頼控』は、当初20話程度の物語として構想されていたともいわれるが、掲載直後から読者の好評を博して2年後の昭和33年まで計100話が書き継がれ、翌34年には続篇となる30話が書き足された。そして以降、『眠狂四郎独歩行』、『眠狂四郎殺法帖』、『眠狂四郎孤剣五十三次』、『眠狂四郎虚無日誌』、『眠狂四郎無情控』と引き続き、昭和49年の最終作『眠狂四郎異端状』にいたるまで、約18年にわたって7作品が書き継がれることになった。

シリーズ第6弾となる『眠狂四郎無情控』が『週刊新潮』に連載されたのは、昭和46年の年初から年末（同年1月2日号から12月25日号まで）にかけてであった。1話読切りのスタイルは踏襲されているが、シリーズも後半になるほど長篇としての性格が強まるという指摘もあるように、² この作品も全51話の集成というよりも、長篇時代小説としての体裁をそなえているとみるべきかもしれない。

全篇の骨格をなすのは、史実として伝えられるのとは異なる虚構の筋立てである。大阪夏の陣で、母淀君とともに城内で自決したとされる豊臣秀頼がじつは秘かに西国へ落ち延びて、とある藩の庇護のもとに生き存えたという設定のもとに、豊臣家の隠し遺産をめぐる騒動の渦中に身を投じた主人公の活躍が描かれていく。史実に即した歴史小説ではなく、“花も実もある絵空事”としての小説作りに徹した作者ならではの物語構成であるが、仮構の筋立てに実在の人物を巧みに配し、海外の日本人町にくらす人々の故国への思いなども取り入れながら、スケールの大きな伝奇時代小説が構築されている。

もっとも、このような宝探しのプロットを有する作品は、柴田の時代小説としては珍しいものではなく、『人間勝負』や『徳川浪人伝』といった時代長篇にも同様の趣向がみとめられるが、眠狂四郎ものに限っていえば『無情控』がその代表格といえる。

拙論は、シリーズの中でも本格的な宝探しの主題を基底に据えた『眠狂四郎無情控』を取り上げ、主人公と主要な作中人物とのかかわりに着目することによって、日本的なダンディとして造型された眠狂四郎の歩みを、孤独と仮面という主題の観点から分節化する試みである。

II 作品のプロットと特徴

早春の頃、伊豆半島基部の葦山で、旧知の代官江川太郎左衛門英竜（坦庵）と再会した眠狂四郎が、半島南端まで足をのぼし、石室崎で灯明台守をしている佐兵衛という老人を訪ねる場面が物語の冒頭部である。3年ほど前まで江戸神田のお玉ヶ池で岡っ引をしていた佐兵衛は、60歳になったのを汐に十手を返上し、みずから請うて石室崎の灯明台守になっていた。その佐兵衛を狂四郎は訪ねようとしているのであるが、世間の慣習に背を向けたこの「無頼の男が、みずから進んで足をはこんで人に会いに行くのは、曾てないことであつた。」³

十手をあずかって四十年、ただの一度も世間にも自身にも慙じる行為をしなかった老人と、かぞえきれぬほど人命を奪った無頼の浪人者と、本来ならば敵同士であるべきものが、どこでどううまが合ったか、互いに、ごく限られた親しい知己の一人にかぞえていたのである。

いま――。

昏れかかった伊豆の山と海を、べつに愛でるでもない暗い眼眸を宙に置いて、坂道を踏んで行く狂四郎は、いつぞや、佐兵衛と交わした問答を、思い出していた。

狂四郎は、佐兵衛に年齢を訊ね、丁度六十になった、という返辞に、「当人も他人も、あまりいい仕事とは思っていない稼業でも、四十年もつとめあげると、お前さんのように、滋味あふれた顔や態度になるのか」

と云い、次いで、この男としては珍しい述懐を、口にしたものであつた。「……迷えば煩惱、悟れば菩提――というのが、わたしのよな悪業の徒は、どう悩んでみたところで、風を繋ぎ、影を捕えるというやつだ。……尤も、

凡夫盛りに神崇め^{とが}なしで、当分は凶迂々々しく、生きて行きそうだが……」⁴

ところが、佐兵衛が守る灯明台への道をたどっていたとき、狂四郎は不思議な武器を使う何者かの襲撃をうける。公儀隠密と思い込んでの襲撃らしかった。その奇襲をかわして狂四郎は佐兵衛と再会するが、浜へ様子を見にいった佐兵衛が同じ武器で襲われて片腕を失ってしまう。二人を襲ったのは、千華と名乗る異邦の娘を伴って秘かに伊豆の浜辺に上陸した海外日本人町の一党であることが判明するが、彼らは狂四郎の素性を知ると、千華を江戸まで伴い、若年寄小笠原相模守に引き渡してもらえまい

かと懇願する。「泥でつくった舟に乗ることになるのかも知れぬが……？」⁵と疑念を湧かせつつ、狂四郎がその依頼を引き受けるところから、事態は思いがけない方向へ進展していく。

騒動の発端となる出来事を冒頭に配するのは眠狂四郎作品の定石であるが、虚無の翳をたたえた主人公の人間味を感じさせる挿話が冒頭に描かれるのが読者の注意をひく。すなわち、信頼する佐兵衛との交流を通じて、ポーカーフェイスの下に隠された狂四郎の素顔が垣間見える始まりとなっているのである。ともあれ、行きがかり上、南方の日本人町育ちのオランダ娘千華を江戸まで送り届けることになった狂四郎は、異国から渡航してきた同胞たちの目的を知り、また葦山代官に頼まれて対面する江戸城同朋頭沼津千阿弥との機縁によって、太閤秀吉の隠し遺産の存在を知るにいたる。元和の頃、長崎奉行であった村山長庵の妻の妹の手によって、豊臣遺金のありかを記した密書が秘かに大奥のいずこかに隠し置かれたが、その密書を大奥へ中臈として入り込む千華の働きで、狂四郎が入手するまでを描くのが作品の前半部である。

次いで中盤から後半にかけて、隠し遺産の秘匿場所である大和までの旅が、道中記仕立てで描かれる。千華たちとは別行動で東海道を西へ向う狂四郎は、執拗な敵方の襲撃を斥けつつ、伊勢街道をたどって志摩の賢島にある磯館という隠れキリシタン館を訪ね、そこで小指の先ほどの犬の玩具が聖母像に嵌め込まれていることに気づく。それが遺金のありかを特定する鍵であると悟った狂四郎は、玩具犬を携え伊賀を通過して奈良へ向うが、行く手にはなお二刀流の剣客志村源八郎や、鍛え抜かれた伊賀名張の忍び百人が待ち受けていた。しかし信義を重んずる土地の忍びたちにも助けられ、敵の包囲網を突破して、狂四郎は初瀬街道を経て大和の室生寺へと辿り着く。そうして太閤遺金をめぐる謎の真相をようやく解き明かした狂四郎は、探し当てた宝（三尺あまりの金無垢の観音像）を千華に託し、安南へと旅立つ坊主衆を見送るところで物語は閉じられるのである。

虚構のプロットが下敷きとはいえ、村山東庵や横井小楠といった歴史上の人物を登場させ、推理小説的な謎解きと冒険活劇の要素を交えつつ、伝奇ロマンを紡いでいく作者のストーリーテラーとしての手腕は冴えて、読む者を飽きさせることがない。太閤の隠し遺産を狙う作中人物たちは多士済々で、幕府若年寄小笠原相模守、目付下条主膳、琉球国の血をひく謎の老人佐賀闇斎、刀痕だらけの面貌をした死神九郎太、下条主膳に仕える薩摩の忍び捨てかまりの弥之助、船乗り上がりの豪商阿蘭陀屋嘉兵衛、江戸城同朋頭沼津千阿弥といった曲者たちが卍巴の争奪戦をくり広げ、そこに老中首座への野望を燃やす本丸老中水野忠邦とその側用人武部仙十郎の思惑が絡み、さらに安南、^{ルソン}呂宋、^{ジャムロ}暹羅などの日本人町で戦国の遺風を守りつづける人々の祖国への想いが重ね合わされて、複雑な人間模様が織りなされるのである。

主人公をとりまく脇役たちの顔ぶれも多彩で、元岡っ引きの佐兵衛をはじめ、巾着切りの金八や講釈師の立川談亭といった、江戸っ子の心意気を身上とするお馴染みの面々が持ち味を発揮するし、狂四郎に心服する、夜働きの吉五郎という義侠心ある盗

賊も、護衛役として千華を長崎まで送りとどける役割をになう。また千華らが潜入する大奥についても、江戸城内の構造や面積、殿舎の仕組みなどと併せて、大奥女中の職名序列が詳しく説明されるほか、⁶ 狂四郎への想いを胸に秘めた女性たちも物語にメロドラマ的彩りを添えている。太閤遺金の謎と絡めて隠れ切支丹のモチーフが組み込まれていることも指摘しておくべきかもしれない。

さらにはシリーズに欠かせない道中記的性格も作品に興味を加える工夫のひとつにかぞえられる。東海道や伊勢街道に加えて、伊勢と大和をつなぐ初瀬街道も舞台となり、宿駅ごとの賑わいと人生模様を写し出す一方、街道筋の随所に配された主人公と刺客たちとの剣戟場面は、時代小説の醍醐味を満喫させてくれる。敵の殺意や殺気を鋭敏に察知する狂四郎独特の第六感が説明されるのはもちろん、剣の流派や剣法奥義の解説なども、⁷ 真剣勝負のリアリティを演出する仕掛けとなっている。

もちろん、これらの趣向や道具立てが、主人公の生きざまを浮き彫りにすべく布置されていることはいうまでもない。狂四郎の独行はシリーズのどの作品でも叙述されるが、吉原から逃れてきた女郎に同情のことばをかけられたとき、「一向に、気の毒な境涯ではない。おのれでおのれの歩く道をきめた男だ。お前とは、ちがう」⁸ という狂四郎らしい科白が吐かれるし、「おれは、これまで、降りかかる火の粉は、払って来たが、自分の方から進んで、他人の生命を狙ったことはない。まして、手先を使って、首を取るような卑劣なまねは、性分にあわぬ」⁹ という彼の身上も語られて、物語宇宙の中心に位置する黒羽二重の孤影を一段と際立たせるのである。

III ダンディ像の原点

読者を愉ませる工夫や仕掛けが、このようにふんだんに盛り込まれる一方で、『無情控』にはシリーズの先行作とは趣を異にする要素も周到に取り入れられている。まず注目されるのは、主人公と水野家側用人武部仙十郎との関係である。従来の作品では、武部仙十郎からの依頼や密命を受けて狂四郎が行動を開始するというのが通例であった。ところが『無情控』では、狂四郎は仙十郎の指示によってではなく、自身の意志と判断で歩むべき道を決めていくという描き方になっている。¹⁰ いやむしろ仙十郎の意に反しても、自己の行くべき道を進むすがたが強調されるのである。

大奥に潜入した狂四郎が、仙十郎の息のかかったお伽坊主に次のように語る場面がある——「わたしは、べつに、武部老人の走狗となっているわけではない。時と場合では、敵の側にもまわる」。¹¹ 狂四郎と仙十郎との関係を改めて読者に考えさせる科白であるが、東海道の宮の宿でも、狂四郎の次のような表白をきくことができる。仙十郎の縁者とおぼしい尾張藩次席家老麻生頼母に「お主、どうして、武部仙十郎を敵にまわすはめになったのじゃな？」と問われたとき、「わたしの方から、すすんで、楯ついた次第ではない。老人が、欲張ったために、斯様な仕儀に相成った」と応えて、狂四郎は仙十郎との関係を次のように説明する。

「わたしは、武部老人に、恩をきせても、きせられたことは一度もない。こ

れは、はっきりさせておきたい。わたしが、おのれの行動を、武部老人の思案によって、しばられる義理はない。」¹²

狂四郎のことを誰よりもよく知り、後見として時に父親代わりの役割もはたしてきたのが仙十郎である。その仙十郎の意に反する行動を、狂四郎はあえてとろうとするのである。狂四郎の動きを知った忠邦と仙十郎の主従が交わすやりとりは、その意味で暗示的である。

「爺——、狂四郎がおもむくままに、見すてておいたならば、どうだ？」

「いまは、それも、考えて居り申すが……」

老人は、ほっと吐息してから、

「というて、すてておけば、狂四郎は、太閤遺産をさがしあてたならば、あのオランダ娘に、のこらず呉れてしまうは、必定。」

「狂四郎自身も、この日本を去って、海を渡ってしまうかも知れぬ、と思うか？」

「あるいは——」

主従は、視線を合わせた。

「狂四郎が、それをさがしあてたならば、殺すよりほかはあるまい。」

忠邦は、云った。¹³

佐兵衛との交流が眠狂四郎という虚無の男の人間性を感じさせる挿話であることは先に触れたが、仙十郎とのつきあいは、屈折した心情を併せ持つ長年の腐れ縁ともいえる関係である。それは上役と配下といった単純な図式で捉えきれるものではなく、忠邦とのあいだには見られない阿吽の呼吸にも似た絶妙の相互理解を伴う間柄なのである。

にもかかわらず、公私にわたる仙十郎との関係を差し置いて、自身の判断と思念を優先させる狂四郎の行動は何を意味するであろうか。しかも彼は自分とは直接係わりのない他者のために、死中に活をもとめるかのような働きをみせるのである。もとより狂四郎は公儀隠密のように組織の掟に縛られた人間ではないし、また事実「武部老人の走狗」でもない以上、わが道を行く姿勢を見せたところで不思議はないともいえる。しかし佐兵衛との私的交流が人間的な温もりを感じさせるのに対して、仙十郎とのあいだに一定の距離を置くかのような狂四郎の描き方はやはり暗示的である。ひとつには、眠狂四郎の原点ともいえる単孤無頼の独行者像への回帰の意味合いを読みとることができるであろう。独立不羈の精神は、個としての独創性を追求するダンディズムにとって不可欠の要件であり、¹⁴ 独行者としての歩みを改めて鮮明にすることを通じて、作者は狂四郎の像をダンディとしての原点に立ち返らせようとしているようにみえる。

しかし同時に、もうひとつ別の意味を読みとることもできる。それは、狂四郎の人

生行路がこれまでとは微妙にちがってくるであろうことをほのめかす意味合いである。なるほど隠し財宝の真相が明らかになり、騒動が決着をみた時点で、仙十郎との関係は一応もとの鞘には収まっている。しかし狂四郎が一時的にもせよ公然と仙十郎の意に背く行動をとったことは示唆的であり、狂四郎がこの先、何者の思念にも縛られることなく、自身の内なる声に忠実に生きていくであろうことの、それは周到な布石とも解しうるのである。

シリーズ後半の作品群に狂四郎の内省や自問自答が目立つようになるのも、おそらくこのことと無関係ではない。『無情控』でも、狂四郎は自身の歩みを次のように顧みているのである。

少年の日から、おのれ一個の力で、降りかかる火の粉を払うべき宿運を与えられて生きて来たこの男が、三十余年の半生で、得たのは、その一步を右するか左にするか、わずか一尺の幅をちがえただけで、行き着くところは千里の差がある、という運命の終始に関する残酷が現実というものである、ということであった。

薄暮に臨んで頤を支えて坐す平穏な日々を、願う心などみじんもない狂四郎は、何かの出来事に出会うた瞬間、おのれの予感に重い比重をかけて来た。

そして、えらんだのは、常に、おのが運命の途上、大きな重荷になる方であった。

そして、危機が去る毎におそって来る云おうようなない倦怠と疲労の中に、狂四郎は、虚無というものを見た。その時、奇妙なことに、生きている実在感がわいた。

敵に対してただの一度も背中^{そびら}を向けなかったのは、危亡を避け得る立場に置かれていなかったためもあるが、生きている実在感をもとめる意識が働いていた、といえる。¹⁵

これは直接的には、狂四郎がこれまでの人生で得た覚知とでもいべきものを語ったものである。しかし同時に、ここには彼の歩みを今後支えていくであろう認識も読みとることもできるように思われる。忠邦と仙十郎のやりとりに、狂四郎の海外渡航を匂わせることばが含まれていたことは先に見たが、シリーズ最終作となる次作でも狂四郎の独行者としての生き方が改めて言及され、また事実彼が海外で行方をくらすという結末になっていることを思い合わせるとき、¹⁶ 狂四郎がこれまでの一切のしがらみを脱して、より自由な個として新たな世界へ旅立っていくことが、すでに『無情控』で予兆されているとはいえないであろうか。こういう見方は飛躍した解釈といわれるかもしれない。しかし次作との有機的連関を考えると、作者がシリーズの終え方を視野に入れていたことは十分に想像できる。おそらく狂四郎は「運命の終始に関する残酷」を知るにもかかわらず、試練の道を歩むのではない。むしろ何ものかによって過酷な運命を生きることを宿命づけられているために、その宿命を自らの十字架

として背負いつづけるのである。無明のうちに“生の実在感”を求めてさすらう孤独な旅路、それが眠狂四郎という虚無の男の人生行路にほかならない。

IV ふたつの仮面

しかし眠狂四郎の生の軌跡について考えるとき、『無情控』にはもうひとり見過ごすことのできない人物が登場する。江戸城本丸の同朋頭沼津千阿弥である。狂四郎作品では、主人公の生きざまを通じて一貫してアイデンティティをめぐる問題が扱われていると見ることができるが、『無情控』では沼津千阿弥と狂四郎というふたつの個性のぶつかり合いを通して、仮面と素面の問題が変奏され、本来の自己とは何かという命題が問い直されることになる。

江戸城同朋頭沼津千阿弥は若き俊秀として登場する。同朋とは「江戸幕府の営中で、大名の案内、更衣、刀剣の上げ下げ、茶弁当などの世話をし、将軍の出行に長刀を持って従った者」の謂で、同朋頭たる千阿弥は「若年寄の支配に属し」、これら同朋衆と「表坊主・奥坊主を管理」¹⁷する役割を担うが、作中では二年前から出仕をやめ、青山の書塾で若い坊主衆に陽明学を講義する日々を送っているという設定になっている。

千阿弥と狂四郎は、もともと一面識はあったものの、さして親しい間柄ではなかった。その二人が邂逅するのは、共通の知己である葦山代官を介してである。将軍家代理として鎌倉の鶴岡八幡宮に詣でる家慶に随行することになっていた千阿弥は、知己である英竜に鎌倉で対面したい旨の書状を書き送っていたが、英竜が他用で出向くことが叶わなくなったため、ちょうど屋敷を訪れた狂四郎に代役を依頼するのである。約束の日、千阿弥と再会した狂四郎は、八幡宮の赤橋上で問答を交わすが、若き俊秀たる千阿弥の才気と狂四郎の冷徹な知性が、対面早々から火花をちらすさまが印象的に描かれている。

「……方今、眺め渡すに、白も黒も色を別たぬ混濁の風潮がはびこり、三民の上に立つ武士は、一種の魔睡に罹って、夢かうつつか、酔醒の間にうろつき、ただひたすらに、押しつけられた故例旧慣の法式に身を縛られて、四六時中汲々として虚偽の振舞いを為して居るのみ。……この濁世に一陣の清風を送らんと志した武士ならぬ同朋が、えらぶは、唯一つ——死あるのみ！」

「正気による狂気の振舞いか。」

「左様、まさにそれでござるよ。」

沼津千阿弥は、頭をあげ、胸を張ってみせた。

狂四郎は、それを阻止すべき立場に、おのれがないことを思った。

しかし——。

狂四郎は、あまりにも明晰な頭脳を具備した者が、敢えておのれ自身を、追い込んだ世界に、苛立たしさをおぼえずにはいられなかった。

「お手前は、いつの間にやら、仮面をかぶって居るうちに、それをはずせなくなった苦しさを、内心の片隅に蔵して居るのではあるまいか？」

と、云わずには、いられなかった。

すると、千阿弥は、あきらかに、侮蔑の色を、表情にした。

「眠殿、貴殿は、これまでに、何百人、人を斬ったか知らぬが、おのれ自身の腹を切ることはできまい。さかしら気に業を背負ったようなその暗さをたたえた顔もまた、素面とは申せぬ。」¹⁸

仮面と素面をめぐる狂四郎とのこの問答ののち、千阿弥は世を憂う檄文をかかげ、幕府役人たちを尻目に、境内に設えた切腹の座で壮烈な割腹自決をとげる。この光景を見届けた狂四郎の「胸底には、沼津千阿弥の自決が、重いものになって、澱」むことになる。「正気による狂気沙汰として、その凄絶の行為を、彼方に押しやってしまうには、あまりにも、これは、この市井の無頼者の認識の外にあった」¹⁹のである。

——沼津千阿弥は、天才である、と評判が高かった。おのが天分に充分の自負を持っていた男に相違ない。おのれの主観を、正確な分析によって予見できた男ということになる。……巫女の靈感のような、曖昧もことしたものを、天分の裡からきっぱりと排除できた男なのだ。諫死などという行為が、いかに無駄であるか、知っていたに相違ない。にも拘らず、あの男は、死んだ。

(中略)

——伝統とみせかけた儀式にしばられ、あらゆる秘密をたたえ、嫉妬を匿し、凡夫の将軍家が君臨して、世間から表裏をとざした江戸城内でくらしているうちに、あの男は、まことの孤独をあじわうようになった。その孤独が、おのれ流の正義をつくりあげた。その正義を、世間に示すために、割腹をえらんだのか？²⁰

自身にこう問いかけつつ江戸へもどった狂四郎は、沼津家の屋敷で、千阿弥の隠し子を身ごもった佐喜という貧乏御家人の娘から、千阿弥が「百万両以上の大金が、日本のどこかの土の中に、かくされている」²¹と、独り言のようにつぶやいていたことを聞かされる。そして残された若い坊主衆の志を知るにいたり、狂四郎は好むと好まざるとに拘らず彼らを助勢する立場に身をおくようになる。

千阿弥に対して友情を持った間柄ではなかった。葦山代官江川太郎左衛門にたのまれて、千阿弥が何を為すか、見とどけに、鎌倉へおもむいただけである。

千阿弥が、自ら諫死をえらんで、門弟をあとに残したにすぎないことであった。

尤も、門弟たちが、あと追い腹をするのは、おそらく、千阿弥の命ずるところではないであろう。

——死ぬ奴は、勝手に死ぬがよかろう。

その冷酷な気持も、狂四郎の脳裡の片隅には、ある。

にも拘らず、狂四郎は、坊主衆の屠腹を阻止すべく、歩き出した。そうしなければならぬ、とおのれ自身に云いきかせたわけではなかった。

——あの同朋の正気による狂気の沙汰は、おれという男を、門下の味方にするだけの凄絶さがあつた、ということか。

何百人、人を斬ったか知らぬが、おのれ自身の腹を切ることはできまい、とあざけた千阿弥の侮蔑をこめた表情を思い泛べ乍ら、狂四郎は、次第に足どりを速いものにした。²²

千阿弥の引き起こした騒動は、物語の展開を左右する大事というわけではない。むしろ付随的なエピソードとして主人公の胸中に去来する私的心象とでも呼ぶべきものかもしれない。にもかかわらず、狂四郎に及ぼす衝撃の大きさという点で、千阿弥の存在感は際立っている。その言動は狂四郎の脳裡につきまとい、あたかも通奏低音のように作品の基底部にこだましつづけるのである。

大奥へ忍び込み、密書のありかを探る狂四郎が自嘲しつつも、千阿弥の記憶をよみがえらせる場面が物語の中盤にも配されている。

諫死などという行為に、嘘のにおいがかぐ者が、目前で、その無駄な死を見せつけられて、受けた衝撃は、小さなものではなかった。

狂四郎の脳裡には、いまもなお、赤橋上で千阿弥と交わした問答が、時と処をえらばずに、よみがえって来る。

(中略)

——人を一人も斬ったことのない男が、おのれの腹を切ることができた。無数の人命を断ったおれには、自身の腹を切る勇氣はない。

あの時以来、おのれにくりかえしている独語が、狂四郎をして、敢えて嫌悪をともなう八丁堀の役人方のまねをさせている、ともいえる。²³

そして物語は幾多の苦難と犠牲のはてに、ようやく探し当てた金無垢の観音像を、安南へ帰る千華に託し、狂四郎が次のように千阿弥の最期を追想する場面で幕を閉じるのである。

——あのお坊主らを、安南へ送ってやれば、これで、一件落着か。

胸中で呟いた狂四郎は、しかし、脳裡によみがえって来た沼津千阿弥の壮絶な死にざまを、はらいのけられないまま、冷たい宵闇の底で、身じろぎもしなかった。²⁴

全篇を通じてこのように幾度となく言及される千阿弥の像に、三島由紀夫のイメージが揺曳していることはほぼ疑いの余地がない。²⁵ 三島が自衛隊の市ヶ谷駐屯地で衝

撃的な割腹自決をとげたのは昭和45年11月25日のことで、『無情控』はその約1ヶ月後の発表であった。三島事件の記憶はいまだ生々しく人々の心に残っていたと推察される。時代の動向や趨勢に敏感であった柴田が作中に同時代の世相や出来事をさりげなく取り込むことは珍しくはないのである。

それでは沼津千阿弥の存在は、本作の中でどのような意味をもつであろうか。千阿弥の生死が必ずしも否定的な色調のみで描かれていないことを考えれば、三島に対する作者のアンビヴァレントな心情がそこに投影されていると解することもできる。しかし『無情控』を一個の文学作品として考えるとき、いっそう重要なのはモデルが誰かということよりも、千阿弥という作中人物を触媒として、どのような詩的真実が表現されているかという点であろう。狂四郎がいみじくも言い当てるように、千阿弥は「仮面をかぶって居るうちに、それはずせなくなつた」人間であり、素顔を仮面で擬装したひとりの仮面演技者である。だが、そもそも素面とは、本来の自己とは何かという問いを発してみると、素面とは所詮、仮面と同義ではないかと応えうる地点に、千阿弥の「正気による狂気の振舞い」は定位されているように見える。そしてそれは、とりもなおさずもうひとりの仮面演技者眠狂四郎の境位にも通じるものなのである。想像するに、作者は主人公と千阿弥との、剣の達人同士を思わせる緊迫した対峙を描くことで、仮面と素面のモチーフを変奏し、それによって表面と深み、正気と狂気、見かけと真実といった二項群をめぐる問いを改めて提起しているのではないか。誤解を恐れずにいえば、千阿弥と狂四郎とは精神の少なからぬ部分を共有する眷属同士のような存在であり、千阿弥をいわば合わせ鏡にして、狂四郎は自身の来し方と行く末を見つめ直しているようにみえる。そこに浮かび上がるのは、自分は一体何者なのかという人間にとっての基本的な問いであり、またダンディズムの根幹にも係るアイデンティティ探求の命題である。それが沼津千阿弥と眠狂四郎という二人の仮面演技者の内的真実の問題として措定されているのである。

V 結びにかえて

シリーズ第1作『眠狂四郎無頼控』の第1話「雛の首」に登場したとき、狂四郎はまだ20代後半の若さであった。²⁶ その冷たいポーカーフェイスも、「明日のために今日を生きては居らぬ」²⁷ というような刹那的言辞も、女性に対する酷薄な仕打ちも、眠狂四郎という市井無頼の浪人者にいかにも似つかわしいものであった。だからこそ、そのニヒルな人物像は読者に受け入れられ、狂四郎は戦後の新たな異端的ヒーローとして広く世に知られたのである。

それが第6作『無情控』では、狂四郎は30代半ばの年齢となっている。初登場から7、8年の歳月が流れた設定であるが、むしろヒーロー像の根本に変わりはない。黒羽二重をまとったその長身瘦軀は、みじんの隙もない稀世の剣客の佇まいを見せているし、彫の深いその相貌には相変わらず虚無の翳が濃い。だがシリーズが進むにつれて、狂四郎の人物像に微妙な変化が生じてきていることもまた否定しがたい。20代の頃の人を寄せつけない冷やかな印象は徐々に影をひそめ、ポーカーフェイスの下の素面が顔

をのぞかせるようになってくる。そのわずかな変化を、年齢を重ねることによる成熟と単純に結びつけることはできないが、虚無の仮面に隠された人間性が仮面の微かな表情となって滲み出てきているとでもいえばよいであろうか。

興味深いのは、狂四郎のこの微妙な変化を、作者自身もどかしがっていることである。『地べたから物申す——眠堂醒話』所収のエッセイの中に次のような一節がある。

私は、「眠狂四郎」を出現させるにあたり、これを徹底的な悪党にするほぞをきめて、書きはじめたのであった。正義の味方、鞍馬天狗などから見れば許すべからざる敵にすることにしたのであった。

(中略)

私自身、眠狂四郎が、女を犯さなくなり、分別くさい傾向を示していることに、嫌悪をおぼえているのである。²⁸

作者のこの嘆きが伝えているように、シリーズも後半になるにつれ狂四郎の像に、あるいは他者と係わり合う彼の姿勢に、わずかな変化が兆しはじめる。真摯に生きる人々へ送られる狂四郎のまなざしには、やさしさが込められるようになるし、ひたむきに生きる人々の心に測鉛をたらす彼の心情には、ぬくもりが感じられるようになる。

もちろん、だから狂四郎が人に説法をしたり、教訓をたれたりする人物に変貌したというのではない。ニヒルなアウトローとして市井の枠組みの埒外に生きる彼の立ち位置は年月を経ても変わらないし、何よりもその孤絶者としての自覚が狂四郎を狂四郎たらしめているのである。しかし旧知の佐兵衛との交流に、また海外の日本人町に暮らす人々へ寄せる想いに、さらにまた千阿弥と若き坊主衆への心情のうちに、狂四郎の微妙な、しかしはっきりとした変化を汲みとることができる。そしてその心持ちの変化と呼応するように、狂四郎の来し方が回想され、激しい闘いの記憶が呼び覚まされるのである。²⁹ これらの記憶や思い出が、読者に過去の事件や出来事を想起させる効果を持つことはもちろんであるが、狂四郎の脳裡に刻まれた心象をも甦らせることで、この虚無の男の体温を感じさせる役割もはたしている。

「百話目には、悽愴無比な斬死をする人物だ、と思いきめていた」³⁰ とは、シリーズ開始当時の作者のことばであるが、延々と書き継いできたシリーズの終焉を、『無情控』連載時にすでに構想に入れていたといえれば言い過ぎになるかもしれない。しかし、人生を達観したとはいえないまでも、狂四郎が海外の同胞たちに想いをいたし、千阿弥門下の若き坊主衆に次代を託そうとするかのような行動をとることは、やはりわたしたちに何ごとかを考えさせる。あえて穿った見方をするなら、人生は別れであるという認識を塗り込めるとともに、眠狂四郎という一代の立役者の退場を見据えて、作者はこの作品を執筆していたのではないか。少なくとも作品の枠組みを超えてシリーズ全体の脈絡の中で捉えるとき、ひとり海の彼方へ去っていく狂四郎のすがたを作者がイメージしていたことは十分に考えられるのである。柴田の評伝『無頼の河は清

例なり 柴田鍊三郎伝』を著した澤辺成徳氏によれば、高輪にあった柴田邸の書斎には、「浪人の肩とがりけり秋の暮」という自筆の句をしたためた色紙が掛けられてあったという。³¹ その浪人のすがたは、いうまでもなく落日へ向って歩をすすめる黒羽二重の孤影と重なり合うのである。

注

- ¹ 清原康正「解説」、柴田鍊三郎『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』、集英社〈文庫〉2006年、307頁。
- ² 尾崎秀樹「解説」、柴田鍊三郎『眠狂四郎無情控』、新潮社〈文庫〉、1981年、636頁。
- ³ 柴田鍊三郎『眠狂四郎無情控』、新潮社〈文庫〉、1981年、7頁。以降、本文中の引用は本書に依る。
- ⁴ 同書、6頁。なお、引用文中のルビは、少数の例外を除き省略した。
- ⁵ 同書、27頁。
- ⁶ 同書、266-270頁。
- ⁷ 同書、418-21頁、555頁等を参照。例えば419頁には、柳生流極意『月陰』の解説がある。
- ⁸ 同書、360頁。
- ⁹ 同書、399頁。
- ¹⁰ この点は、尾崎秀樹の「解説」でも指摘されている。同書、638頁。
- ¹¹ 同書、293頁。
- ¹² 同書、459頁。
- ¹³ 同書、384頁。
- ¹⁴ 柴田はダンディズムをこう定義している——「ダンディズムとは、他人に似ることを厳しく警戒する独創性の追求によって、真価を発揮する。いわば、ローマ人以上のイギリス人のエゴイズムの華なのである。」柴田鍊三郎「賭博者はダンディであるべきだ」『地べたから物申す——眠堂醒話』、新潮社、1976年、184頁。
- ¹⁵ 柴田『眠狂四郎無情控』、176頁。
- ¹⁶ 『異端状』には、「場合によっては、老人の敵にもなる。これまで、そうして生きて来たし、これからも、気ままな主義を変える存念は、いささかもない」という狂四郎の科白がみられるし、宝瓶宮黒人と名乗る異邦の占星学者には「あの人は、さむらいの姿していますが、心は、自由で孤独で、何者にもしばられてはいません」ということばを語らせている。柴田鍊三郎『眠狂四郎異端状』、新潮社〈文庫〉、1990年、67頁および192頁。
- ¹⁷ 新村出編『広辞苑 第六版』、岩波書店、2008年、1987頁。
- ¹⁸ 柴田『眠狂四郎無情控』、43-44頁。
- ¹⁹ 同書、57頁。
- ²⁰ 同書、57-59頁。
- ²¹ 同書、104頁。
- ²² 同書、73頁。
- ²³ 同書、292頁。

- ²⁴ 同書、633 頁。この引用の前にも千阿弥に言及した次の一節がある。(百地三郎兵衛が)「懸声凄まじく、左脇腹へ切先を突き刺し、右へぎりぎり切りまわす光景を、目撃し乍ら、狂四郎は、今年一月二十七日、鎌倉鶴岡八幡宮境内の神楽殿で、同朋沼津千阿弥が割腹自決を遂げた姿を、脳裡によみがえらせずには、いられなかった。」同書、603 頁。
- ²⁵ 尾崎「解説」、柴田『眠狂四郎無情控』、638 頁を参照。
- ²⁶ 『無頼控』の第一話「雛の首」に「まだ三十にはなるまい」という記述がある。柴田錬三郎『眠狂四郎無頼控(一)』、新潮社〈文庫〉、1976 年、8 頁。
- ²⁷ 柴田錬三郎『眠狂四郎無頼控(三)』、新潮社〈文庫〉、1976 年、97 頁や『眠狂四郎独歩行(下)』、新潮社〈文庫〉、1976 年、264 頁等を参照。
- ²⁸ 柴田「悪党の目を見よ」『地べたから物申す——眠堂醒話』、27-28 頁。
- ²⁹ 『無情控』の 441-442 頁に、狂四郎が 15 歳まで新也と呼ばれていた事実が語られているほか、570 頁では黒指党への言及を通じて『独歩行』の中の出来事が回想され、404 頁では『孤剣五十三次』中の経験が想起されている。
- ³⁰ 尾崎秀樹「解説」、柴田錬三郎『眠狂四郎孤剣五十三次』、新潮社〈文庫〉、1978 年、746 頁。
- ³¹ 澤辺成徳『無頼の河は清冽なり 柴田錬三郎伝』、集英社、1992 年、9 頁。

(信州大学 全学教育機構 教授)

2016 年 1 月 12 日受理 2016 年 2 月 8 日採録決定